

## 声楽分野における社会貢献活動（Ⅰ） Social Contribution Activities in the Vocal Field（Ⅰ）

渡邊寛智  
（保育学科）

キーワード：声楽、社会貢献、演奏、合唱、指揮

### 1. はじめに

声楽分野における社会貢献活動には様々な活動がある。地域の演奏会に出演して歌を歌うこと、地域の方々、地域の合唱団の方に向けて声楽的な指導を行うこと、地域の演奏会を企画、構成、演出を行うなどの活動が挙げられる。そこで、筆者が本学に着任した2018年度から2019年度までの2年間の取り組みを項目ごとに分けて、声楽分野における社会貢献活動について報告をする。

### 2. 声楽演奏における社会貢献活動

声楽分野における社会貢献活動にはどのような活動があるのか。ここでは、近年筆者が参加した演奏会について項目ごとに報告する。

#### 1) 生田春月を歌う ～豊かな抒情への世界へ～

2018年9月22日に米子市淀江文化センターさなめホールで行われた演奏会「生田春月を歌う ～豊かな抒情の世界へ～」に出演した。この演奏会は、米子市出身の詩人生田春月（1892-1930）の顕彰活動に取り組んでいる「春月会」（上田京子代表）が活動の一環として主催する演奏会である。春月会の上田代表による生田春月の解説、また詩の朗読とその詩によって作曲された歌曲を発表する会であった。生田春月の歌曲以外にも、生田春月と親交のあった島崎藤村（1872-1943）、北原白秋（1885-1942）による詩によって作曲された歌曲もいくつか演奏された。詩の朗読は、NHK文化センター米子朗読教室の矢末美智子氏、野口愛子氏が行い、演奏は鳥取短期大学名誉教授の白石由美子先生と筆者で行った。

生田春月は明治25年に米子に生まれ、大正時代に活躍した詩人である。16歳で上京し、生田長江（1882-1936）の書生となり文学の道に進むことになる。その後『靈魂の秋』『感傷の春』などの詩集を出版し、詩人としての地位を確立した。生田春月が活躍した同時代の大正時代の作曲家から平成の作曲家まで、幅広い世代の作曲家

が生田春月の詩を用いて作曲している。当然ながら、その音楽の曲調は童謡・唱歌のように親しみやすいものから現代的で複雑な構成で音楽が成り立っているものまで実に様々な楽曲が存在している。一人の詩人による詩を、時代を超えて多くの作曲家が作曲を行うということは大変珍しいことである。一般的に多く見受けられるのは北原白秋、山田耕筰（1886-1965）のように同じ世代の詩人、作曲家による作品が多い。しかし、生田春月の詩は年代を超えて作曲され続けているのである。生田春月の詩は、感傷的で暗い一面があるもののどこか甘美な部分も持ち合わせた独特の世界観を持っている。その独特な世界観が世代を超えて作曲されている理由だと考える。

筆者自身も生田春月の詩による歌曲作品を歌うことは初めてであった。様々な年代によって作曲された多くの作品を演奏することは、それぞれの時代の作曲家たちによる音楽に自分の演奏法を当てはめなければならないので難しい部分もあった。だが、様々な世代による作曲家の作品は音楽の方向性が全く異なる訳ではなく、作曲家によって技法は異なるものの、生田春月の詩による同じ世界観を持ち合わせた音楽になっていることに気づかされたのである。生田春月の詩による歌曲作品は、一般的に知られている作品とは言えない。筆者と同様に当日来場された方も初めて聴くという方が多かった。山陰地方出身の詩人、生田春月の詩による歌曲を朗読や歌で披露することで、多くの人に生田春月の詩の魅力や世代を超えた作曲家たちの素晴らしさを伝えることができたと考える。なお、この演奏会の様子は日本海新聞2018年9月23日の記事として掲載された（図1）。

**生田春月の世界に酔う**  
淀江で朗読・歌の会  
米子市出身の詩人  
生田春月の詩の朗読と



春月の詩を朗読する矢末さん  
= 22日、米子市淀江町西原の  
市淀江文化センター

と、家の手伝いをする  
ことはサッカーよりも  
大事です。きょうから  
2日間は、いくら失敗  
してもいいので、目標  
を持って、力いっぱい  
サッカーをしてください  
と呼び掛けた。  
JA鳥取信連の入江

曲を付けた歌を披露す  
る「春月をうたう」豊  
かな抒情の世界へ」  
が22日、米子市淀江町  
西原の市淀江文化セン  
ターで開かれ、来場者  
約500人が春月の世

少年期▽活躍期・前  
期▽活躍期・後期に  
分け、上田代表の解説  
で矢末美智子さん（N  
HK文化センター）米子  
朗読教室と野口愛子  
さん（同）が「夕の海」  
や「誤植」など13作を  
朗読した。  
春月をはじめ春月と  
親交のあった島崎藤村  
や北原白秋らの詩に曲  
を付けた歌も、白石由  
美子さん（鳥取短大  
名誉教授）と渡辺寛智  
さん（鳥根県立大短期大  
学部専任講師）が渡辺  
芳恵さん（鳥取短大非  
常勤講師）のピアノで  
14曲を歌い上げ、朗読  
や歌が終わるたびに客  
席から大きな拍手が送  
られた。（景山誠）

総当たりのリーグ戦が  
行われる。最終日は、  
リーグ戦の残り試合が  
行われ、各グループ1  
位チームを表彰する。  
大会では選手たちのス  
ポーツマンシップや試  
合に取り組む姿勢も評  
価される。（加嶋祥代）

図1「日本海新聞」2018年9月23日掲載「生田春月の世界に酔う」

## 2) 県民による“第九”2018 米子公演

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン Ludwig van Beethoven (1770-1827) の第九交響曲は、国内で年末になると全国各地で演奏されている。テレビなどのメディアからも年末になると流れてくる日本人に最も親しまれている交響曲である。

ベートーヴェンの第九交響曲は、1824年にウィーンで初演されたその名の通りベートーヴェンの9作目の交響曲である。それまでの交響曲は管弦楽だけによる演奏であったが、ベートーヴェンはこの交響曲で初めて人の声を交響曲に取り入れたのである。第4楽章にソプラノ、アルト、テノール、バリトン（もしくはバス）の4人のソリストと大合唱によって、フリードリヒ・フォン・シラー Friedrich von Schiller (1759-1805) の「歓喜に寄す」の詩が歌われる。ただし、バリトンによって歌い始められる有名な1節、「おお友よ、このような旋律ではない！（O Freunde, nicht diese Töne!）」はシラーの原詩ではなくベートーヴェンが考えたものとされている。

山陰地方でも年末になると島根、鳥取の両県で第九交響曲の演奏会が毎年のように行われている。筆者もこれまでに第九交響曲のソリストを務めたことから、2018年11月25日に米子市で行われた第九演奏会にバスソリストとして出演した。鳥取県では昭和60年に行われたわかとり国体でベートーヴェンの第九交響曲が披露され、その年から毎年第九演奏会が行われている。2018年の演奏会では、指揮者に東京ユニバーサルフィルハーモニー管弦楽団の常任指揮者である松岡究氏を迎え、オーケストラと合唱は県内外の演奏者の方が務めた。また、ソリストはソプラノに寺内智子氏（鳥取オペラ協会）、アルトに三宮美穂氏（東京二期会）、テノールに澤崎一了氏（藤原歌劇団）、バリトンを筆者が務めた。なお、この演奏会の紹介文が2018年11月17日の日本海新聞に掲載されている（図2）。

地方における第九演奏会は、多くの地域の演奏者によって成立している。演奏者は演奏会に向けての練習など、第九演奏会の成功のためにたくさんの人々が貴重な時間を割いて集うのである。そこには、第九交響曲がもたらしたと言える独特の音楽文化が存在している。シラーの歌詞に「すべての人は兄弟となる（Alle Menschen werden Brüder）」とあるが、ベートーヴェンの第九交響曲が持つ力が人々を音楽の絆で結び付けているのである。そのソリストとして参加できることは大変光栄なことであり、今後も社会貢献活動の一環としてこれからも継続的にやりたい活動の一つである（図3）。

**ぶか**

## 人類の喜び、 人間愛に思いを

3年ぶり「県民による第九米子公演」 25日

3年ぶりの第九米子公演。苦難を乗り越えようとする勇気が近づいてきました。今回は、エルデは精神的にはベートーヴェンの影響を受けた作曲家であるといわれています。この「第九」の前のプログラムとなり、この「第九」の公演を通して、普的な人間愛に思いをはせるのも、意義深い演奏だと思いますので、ぜひとも足を運んでください。

指揮は30年近くの間、鳥取県のオーケストラやオペラを指揮され、その音楽性の質の高さと指導力に定評のある松岡先生をお迎えしています。新田交えたリストの皆さん、演奏も大きなお力添えです。中では県内在住の寺内智子さんと渡邊寛智さんの演奏に期待が寄せられ、公演推進委員会事務局。

（井田博之・第九米子公演推進委員長）

◇「第32回県民による第九米子公演」は25日午後2時から、米子市公会堂で、入場料前売り一般2千円（当日500円増）、高校生以下千円。

（3）1266、第九米子さんの演奏に期待が寄せられ、公演推進委員会事務局。

図2 「日本海新聞」2018年11月17日掲載「人類の喜び、人間愛に思いを」



図3 2018年11月25日「県民による“第九”2018米子公演」



### 3) 岡山フィルハーモニック管弦楽団ニューイヤーコンサート

モーツァルト作曲歌劇《フィガロの結婚》演奏会形式

岡山フィルハーモニック管弦楽団は、1992年に設立されたプロの演奏家によるオーケストラである。岡山シンフォニーホールを拠点に定期演奏会を開催しており、国内外から著名な指揮者、ソリストを招いている。2013年からは、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の元首席オーボエ奏者で指揮者のハンスイェルク・シェレンベルガー氏を首席指揮者に迎え、質の高い音楽を聴衆に届け続けている。

毎年元旦に行われるウィーンフィルハーモニー管弦楽団のニューイヤーコンサートと同様に、世界各地で様々なオーケストラがニューイヤーコンサートを開催している。岡山フィルハーモニック管弦楽団も、毎年1月にニューイヤーコンサートを開催している。2018年のニューイヤーコンサートから、プログラムの後半にコンサート形式でオペラのハイライト公演が上演されている。2018年はモーツァルト作曲の歌劇「魔笛」が上演され筆者はザラストロ役を演じた。2019年1月20日に行われたニューイヤーコンサートでは、同じくモーツァルト作曲の歌劇「フィガロの結婚」が上演されバルトロ役を務めた。タイトルロールであるフィガロ役には昭和音楽大学准教授の柴山昌宣氏、その恋人であるスザンナ役はウィーン在住の森野美咲氏が務め、国内外から優れた歌手が集まり演奏会に花を添えた（図4）。



図4 岡山フィルハーモニック管弦楽団ニューイヤーコンサート 2019 右端が筆者

この演奏会では、オーケストラの前側に小さな舞台が設けられており、その場所で机、椅子などの小道具を用いながら衣装を着て、お芝居をしながら歌を歌うスタイルであった。数日の間に指揮者、コンサートマスター、歌手と打ち合わせをし、本番を迎えなければならない。タイトなスケジュールであるが、狭い空間での効率的な芝居の仕方、演出法など、優れた共演者から学ぶことは多く、学んだことを大学の授業や地域の演奏会などに取り入れることが可能であると感じられた。

#### 4) ひろしまオペラルネサンス公演モーツァルト作曲歌劇《魔笛》

ひろしまオペラルネサンスは、公益財団法人広島市文化財団が主催しているオペラ公演である。著名な指揮者、演出家、広島交響楽団によってレベルの高いオペラ公演が毎年のように上演され続けており、西日本でも屈指のオペラ公演と言われている。2019年9月28日に行われたモーツァルト作曲の歌劇《魔笛》公演では、指揮者に神奈川フィルハーモニー管弦楽団常任指揮者である川瀬賢太郎氏、演出家に藤原歌劇団など日本の主要なオペラ作品の演出を手掛けている岩田達宗氏を迎え、地方とは思えないレベルの高いオペラ公演が行われた。また、キャストは広島、関西、関東から優れた歌手が集められた中で、筆者はオペラの中心人物であるザラストロ役を演じた（図5）。



「ひろしまオペラ・音楽推進委員会」

図5 ひろしまオペラルネサンス公演モーツァルト作曲歌劇《魔笛》写真中央が筆者

なお、この公演評が2019年の「音楽の友」12月号に掲載されている(図6)

Concert Reviews

オペラ/声楽  
ひろしまオペラ・ネッサンス  
モーツァルト《魔笛》  
9月28日・JMSアステールプラザ

表情を見せつけていた。音楽の流れや構成も見事で、長大な力テンツアや壮大な終結部までの進行に華があった。第2楽章は、ゆつくりとした深い情感を込めた旋律線が魅力で、静かさのなかの盛り上がりで聴衆の心を捉えていた。第3楽章は、速いテンポだが音楽に重みがあり、緻密な進行での音楽創りが鮮やかで、盛り上がり勢いがあった。

2曲目の「交響曲」の第1楽章は、冒頭の低弦楽器群の効果で、不安感や激しさも上手く表出され、雄大で起伏のある進行だった。第2楽章は、速いテンポでも色彩が豊かで勢いや力強さがあり、変化に富んだ展開で第3楽章は、ゆつくりとした旋律線に美しい叙情性があり、音の重ねや強弱にも音楽の深さを感じさせていた。第4楽章は、喧騒や賑やかさが華やかで明るく、さらにはその流れに繊細な表情も見せていた。変化にも優れ高揚感もあり壮大な盛り上がりで曲を締めくくっていた。



サラ・チャン(vn)、リオ・クオクマン(指揮)、広島交響楽団  
写真提供=広島交響楽団



ひろしまオペラ・ネッサンス《魔笛》

●川瀬賢太郎(指揮)、岩田達宗(演出)、渡邊貴智(サラストロ)、田坂蘭子(夜の女王)、須藤尊臣(タミーノ)、原田幸子(パミーナ)、佐藤由基(ババゲーノ)、山下裕子(ババゲーナ)、福西仁(モノスタース)、他、広島交響楽団、ひろしまオペラ・ネッサンス合唱団

タミーノは、気品のある動きや上品な歌唱での表情に深みがあり、パミーナの歌唱力や演技も優れたものだった。ババゲーノは、声量も豊かで台詞回しもよく、陽気な自然児を活発な動きで演じていた。ババゲーノも歌唱や動きに個性が光り、モノスタースは、悲哀や嫉妬の表情に優れ、次第に孤立を深めていた。夜の女王は、美しく存在感があり、パミーナとの親子の愛、憎悪、2幕での狂乱と変化に富んだ役を熱演していた。サラストロは、威厳のある堂々とした歌唱や演技で存在感があり、長い台詞に言葉の重みや葛藤も感じさせていた。3人の侍女や童子もその役割を理解した歌唱や演技でオペラ自体を引き締めていた。合唱の質も高く、キャスト一人ひとりの声質のよさや声量、それに演技力の高さ

でこの複雑な人間模様を見事に演じたと見えるだろう。

オペラの流れや、音楽の崇高さをも理解した演出は、人の心の中の光と闇、矛盾や苦悩までも丁寧に描き、男女の愛、家族の愛の素晴らしさだけでなく、主人公たちを傷つけるような愛も、上手く表現していた。

●以上、日比野章彦

九州の  
演奏会から

オーケストラ  
九州交響楽団(第378回)  
10月11日・アークス福岡●広上淳一(指揮)、豊嶋泰嗣(Vg)、ジャン・チャクルム(R)、ヴェルディ「歌劇シチリア島の夕べの祈り」序曲、ショパン「ピアノ協奏曲第1番」、ベルリオーズ「交響曲「イタリヤのハロルド」」  
広上は3年ぶりの定期登場。ヴェーエルで覆われたふわりとした音色の弦で始まり、この質感が公演最後まで特徴的であった。音色の多彩さや躍動の点では、木管楽器との相性のよさを感じさせる指揮者だ。協奏曲は浜松国際ピアノコンクールで優勝したばかりの新人との共演。チャクルム独特の緩急法に驚かされた。高音域などチェレスタのような音色の妙もあるが、むしろ自由だが奔放ではないうねりでフレーズの波を作っていく弾きぶりが個性的。それゆえ最初はオーケストラとの間に距離が感じられたが、次第に両者は一体化していった。桂冠コンサートマスターを迎えたベルリオーズでは、ハープと融合した冒頭をはじめ、ハロルド

図6 「音楽の友」2019年12月号 コンサートレビュー

今回のオペラの公演では、声楽的な技術、舞台での表現方法など、自己の研鑽を積むことができる貴重なオペラ公演であった。この本質的な声楽技術、表現法を磨くことは、歌うこと、表現することの本質を大学の授業では学生に、また講習会などでは地域の方々に伝えることができると考える。なお、この演奏会の講評が「音楽の友」2019年12月号に掲載されている(図6)。

### 3. 合唱・声楽指導、地域の演奏会の企画や構成における社会貢献活動

合唱、声楽に関する指導、および地域の演奏会の企画、構成、演出も声楽分野における社会貢献活動の中に必要とされる活動である。ここでは3つの事例を報告する。

#### 1) 島根県立大学松江キャンパス公開講座「椿の道アカデミー」

島根県立大学松江キャンパスでは、一般の方々に向けて公開講座「椿の道アカデミー」が開かれている。専任の教員をはじめとして外部からも講師を招聘し、それ

ぞれの専門性を活かした公開講座が開講されている。筆者は、2017 年度から講師を務めている。地域の方々を大学に招いて「声を出してうたってみよう！」と題したわかりやすい発声講座、わらべうた、童謡・唱歌の歴史や特徴などの解説を含めた講座を担当した。普段はなかなか地域の方々と交流する機会がないが、公開講座「椿の道アカデミー」で地域の方々と交流できることは大変有意義な時間であった。学生とはまた違った視点から質問を受けたりするなど貴重な時間を地域の方と共有した（図 7）。今後もこのような声楽分野ならではの講座を継続的に行いたいと考える。



図 7 2018 年度島根県立大学松江キャンパス公開講座「椿の道アカデミー」

## 2) 地域の合唱団への指導

2013 年から米子市を中心に活動している一般の合唱団「合唱団 凜（旧称：コール凜）」の指導を行っている。合唱団の人数は 15 名ほどで、混声合唱を行っている。この団の主な活動は、合唱コンクールへの参加、定期演奏会の開催、病院や地域の行事などで演奏を披露している。2017 年には米子市文化奨励賞を受賞し、米子を代表する合唱団として成長し続けている。また、2018 年には米子コンベンションセンターで定期演奏会を開催し、本格的な合唱曲から親しみやすい合唱曲を披露し、好評を博した。

合唱指導を行うことは単に声楽的な指導を行うことだけではない。一般の方に歌うことの楽しさをより一層味わってもらうことを考えながら指導を行い、演奏会を開催する際にも来場される方々に音楽をより身近に感じて頂けるような企画、構成、演出をしなければならないことを心がけている。

## 3) 地域の演奏会の企画、構成、演出

2018 年 12 月 15 日に米子市淀江文化センターで行われた「ファミリーコンサート 音楽のおもちゃ箱 vol.5」の構成と演出を行った。米子市と米子文化財団が主催する



この「ファミリーコンサート音楽のおもちゃ箱」は、各回に地域で音楽活動を行っている方をゲストとして招き、赤ちゃんから大人まで一緒に楽しめる音楽会を開催している。筆者も過去に、米子管弦楽団のみなさんと共に指揮者と司会で出演させて頂いた。2018年はスケジュールの都合で出演することが難しく、構成と演出を担当した（図9）。

音楽の楽しみを一般の方や子どもたちに知ってもらうためには、演奏を行う音楽家にある程度の力量がなければ音楽の素晴らしさは伝わらない。そこで、コンサートでは、地域で活躍する4人の音楽家の方々に協力を依頼した。司会進行役を作曲家の上萬雅洋氏にお願いし、演奏者はピアニストの渡邊芳恵氏、ソプラノ歌手の佐々木まゆみ氏、ハーモニカ奏者の坂上和佳子氏に出演頂いた。演奏会は午前の部、午後の部があり、午前の部は低年齢のお子さんに合わせて短いプログラムに



図9 ファミリーコンサートポスター

し、年齢層が上がる午後の部はプログラムをやや長めに設定した。そして、来場された方が演奏者と一緒に演奏に参加してもらうために、スタッフの方をお願いしてゴム紐に鈴をつけた簡単な楽器を無料配布してもらい、演奏者と来場者の方が一緒に演奏するコーナーを設けた。ただ聴いて終わる演奏会ではなく、演奏に参加することで子どもたちに音楽の素晴らしさを体感してもらう機会になれたのではないかと考える。またこの演奏会では、開演前にホールロビーでNPO法人こども未来ネットワークの方により木のおもちゃ体験が行われていた。子ども向けの演奏会では、演奏そのものも大事であるが、開演前にどのようにホール

で過ごしてもらうかということも忘れてはならない。おもちゃ体験や楽器体験など、演奏を聴く前の良き導入となるような方法も考える必要がある。このような活動は、今後も島根、鳥取の両県で継続的に行う予定である。

#### 4. 唱歌・童謡、おとぎ歌劇などに関する研究

2018年に着任をしてから、童謡・唱歌、おとぎ歌劇などに関する研究を行っている。この研究には、鳥取市にあるわらべ館（公益財団法人鳥取童謡・おもちゃ館が運営）のスタッフである平緒佐和氏にご協力頂いている。わらべ館には、童謡・唱歌、また現在の子どものためのオペレッタ、ミュージカルの原型となったおとぎ歌劇などの貴重な楽譜が数多く保存されている。童謡・唱歌については、なぜ外国からの歌が日本の保育の現場で多用されているのかについて研究を行っている。2018年11月には、松江市立女子高等学校の生徒さんが本学を見学された際に、その研究の一端を模擬授業で生徒さんにわかりやすく伝えることができた（図10）。おとぎ歌



劇については、わらべ館に残る大正時代の資料を元に、文献等も調べ、現代に伝わる日本独自の子どものためのオペレッタの楽譜と台詞の構成がなぜ現代の形になったのかを本学研究紀要にまとめている。今後も声楽分野独自の研究活動を継続的に行う予定である。

図10 松江市立女子高等学校の生徒さんに向けての模擬授業

#### 5. おわりに

声楽分野における社会貢献活動は、地域で行われている様々な演奏会に参加し、演奏を行うだけではなく、合唱指導や講習会での声楽的な指導、地域の演奏会の企画、構成、演出、声楽分野独自の研究など様々な活動が存在する。また、地域で音楽活動を行っている方々と交流を深めることも大切な活動の一つである。このように、声楽分野の研究活動を行うことは社会貢献活動にもつながることが多く、今後も地域社会のために継続的に行わなければならないと考える。

#### 参考資料

日本海新聞「生田春月の世界に酔う」2018年9月23日朝刊掲載

日本海新聞「人類の喜び、人間愛に思いを」2018年11月17日朝刊掲載

日比野章彦「コンサートレビュー」『音楽の友』2019年12月号, p. 195,  
音楽之友社